

平成22年度 横浜国立大学法科大学院入学試験
小論文試験試験問題 (試験時間 13:00～16:00)

問題 1

次の文章(1)(2)(3)を読み、各問に答えなさい。

(注)著作権法等の配慮により問題文は割愛します。

なお、問題文は、次の文献から引用しております。

文章(1) 藤原正彦『遙かなるケンブリッジ』(新潮文庫、1994年)31頁～35頁

文章(2) 植松正「公平の錯覚」ジュリスト678号(1978年)10頁

文章(3) 我妻栄『法律における理屈と人情』(第2版)(日本評論社、1987年(初出1955年))6頁～14頁

問 1

文章(1)で述べられている「fair」と、文章(2)で用いられている「公平」の違いについて説明しなさい。(100字以内)

問 2

文章(3)について、論理の筋道がわかるように要約しなさい。(300字以内)

問 3

文章(2)の筆者の考える「公平」以外の物差しの必要性和、文章(3)の筆者が考える「杓子定規」の効用について両筆者の考えを比較しなさい。(200字以内)

問 4

問3の比較を踏まえて、文章(2)と文章(3)の両筆者の考えについてあなたの考えを、具体例を挙げながら述べなさい。(200字以内)

問題 2

次の文章(1)・(2)・(3)を読み、各問に答えなさい。

(注)著作権法等の配慮により問題文は割愛します。

なお、問題文は、次の文献から引用しております。

文章(1) 辻井喬 = 上野千鶴子『ポスト消費社会のゆくえ』(文藝春秋社、2008年)
292頁3行目～299頁末

文章(2) 吉見俊哉『ポスト戦後社会』(岩波書店、2009年)iv頁9行目～viii頁
14行目

文章(3) 鴻上尚史『「空気」と「世間」』(講談社、2009年)186頁9行目～188頁
11行目

また、文章(1)中の「堤」とは堤清二(セゾングループ元会長)のことであり、辻井の本名である。

問 1

上野が下線部のように語るのはどのような理由によると考えられるか。70字程度で説明しなさい。

(付記)下線部 とされた部分は「296頁9行3字目～33字目」

問 2

辻井が下線部のように思った理由を50字程度で説明しなさい。

(付記)下線部 とされた部分は「298頁16行19字目～35字目」

問 3

下線部がどのようにして、またなぜ到来したのかを、文章(2)に従って80字程度で説明しなさい。

(付記)下線部 とされた部分は「iv頁10行34字目～40字目」

問 4

上野(文章(1)の対談者の一人)と吉見(文章(2)の筆者)は、オウム真理教事件の見方について異なる点がある。それを90字程度で説明しなさい。

問 5

鴻上(文章(3)の筆者)は、オウム真理教事件をどう論評しそうか、文章(3)の語を使いながら40字程度で記しなさい。

問 6

村上春樹『1Q84』(新潮社、2009年)のように、1980年代のどこかを一つの時代の区切りとする見方がある。1980年代の事件(ただし、文章(2)本文中に挙がっていないもの)に限り、また、解答者の個人的経験に類するものは除く)を1つ取り上げ、それが時代を画する理由を文章(1)・(2)・(3)を踏まえて150字程度で述べなさい。(15点)

